

としよぶらり

米子高専図書館情報センター報

ISSN 1344-5634

第 88 号

平成 21 年 12 月 14 日発行
米子工業高等専門学校
図書館情報センター



各科推薦図書

目 次

平成21年（第36回）校内読書・エッセイコンクール優秀作品発表

〈読書感想文の部〉

最優秀賞	建築学科	1年	小泉友伽菜	「ベルナのしっぽ」を読んで ……2
優秀賞	電気情報工学科	1年	堀越 絵廉	「天国で君に逢えたら」……………3
優秀賞	電気情報工学科	1年	前田 果澄	「キッチン」を読んで ……4
優秀賞	電子制御工学科	1年	盛山竜之介	「人間失格」を読んで ……5
佳作	電子制御工学科	1年	濱田三奈美	「そして誰もいなくなった」……………6
佳作	物質工学科	1年	才原 知里	「ポプラの秋」を読んで ……7
佳作	物質工学科	1年	野見 昌史	「たまごを持つように」……………8

〈エッセイの部〉

最優秀賞	物質工学科	1年	香川奈緒子	挑戦者 ……9
優秀賞	電気情報工学科	1年	小倉 脩平	おばさんの手 ……10
優秀賞	電子制御工学科	1年	西村 康祐	走る ……10
佳作	(匿名希望)		ぼ う ず	甲子園予選 ……11
佳作	物質工学科	1年	松村 美里	染み渡る水のように ……12
佳作	建築学科	1年	井之上 武	平和のありがたさ ……13

新着図書紹介 (各科・一般科目推薦) ……14

平成21年度(第36回)

校内読書・エッセイコンクール優秀作品

読書・エッセイコンクール講評

国語科 永井 猛

今年の入賞作品の傾向としては、読書感想文が重いテーマを扱ったものが多かったのに対し、エッセイは身近な出来事、部活動などを取り上げたものが多かったせいも、エッセイのほうに明るく、のびやかな印象を受けた。

各作品についてコメントしておく。

読書感想文の部で、最優秀賞を獲得した「『ベルナのしっぽ』を読んで」は、病気により失明した著者と盲導犬ベルナとの初めての出会いから、かけがえのないパートナーになるまでを、丁寧に読み取っている。目の見える人間が、目が見えることによって見落としてしまうものがあるのでは、という指摘は貴重である。

優秀賞の「天国で君に逢えたら」「『キッチン』を読んで」は、ともに生と死を見つめている。「天国で君に逢えたら」は死に立ち向かうにはどうすればいいのかを追求している。「『キッチン』を読んで」は、生と死は表裏一体で、死があるからこそ生が充実するのではとの思いを記している。もう一つの優秀賞の「『人間失格』を読んで」は、主人公は特別な人で自分とは違うという思いが読み進むにつれて変化して、自分自身にも同じようなところがあるのではと感じ出す。小説によって自分自身をとらえ直す、深い読みとりをしている。佳作の3点は、小説の持つ魅力を伝えてくれる。「そして誰もいなくなった」からはミステリー小説を読む怖さと楽しさを、「『ポプラの秋』を読んで」は、幼い子供を勇気づける老婦の思いやりを、「たまごを持つように」は弓道部に集う部員の苦しみと変化を書き留めている。

エッセイの部で最優秀賞に選ばれた「挑戦者」は、高校野球の醍醐味を余すところ無く書き尽くしている。何と言っても歯切れの良い文体が魅力的で、読む者をぐいぐいと引っ張り込んでいく。偶然見た高校野球の決勝戦、それも9回、10対4の大差で2アウト、すぐ終わると思っていた試合が、驚異的な粘りで10対9まで追い上げるといふ、意外な展開。そしてあっけない幕切れ。勝者が泣き、敗者が笑うという不思議、それらを巧みな筆致で描き取っている。青空、青いメガホンと、青のイメージがうまく活かされており、一陣のさわやかな熱風を感じさせる文章である。誰かに話さずにはいられない興奮が伝わってくる。同じく高校野球を扱った佳作の「甲子園予選」は、実際にプレーする側から書かれたもので、選手として出た筆者の不安、緊張感が伝わってくる。当事者でなければ書けない経験の重みがある。

優秀賞の「走る」、佳作の「染み渡る水のように」も部活を扱っていて、ともに毎日、やる気を維持し、練習を続けることの難しさが描かれている。「走る」のひたむきさ、「染み渡るみずのように」の淡々とした日常が写し取られている。優秀賞の「おばさんの手」は、通学電車でのふとした出来事を扱い、心温まる読後感を与える。「おばさん」の息子さんはどうされたのだろうか、などと考えてしまう文章である。佳作の「平和のありがたさ」は、戦争を知っている「おじいさん」の言葉から平和のありがたさが無理なく納得できる。

エッセイのほうは、自分の体験が描写されており、その点、生き生きとしているが、読書感想文のほうは、本の世界をどう自分に引きつけて捉えるかが大切で、重く思索的にならざるを得ないのだろう。

エッセイで自分の日常を捉え直し、読書で視野を拡大して行ってほしいと思う。

読書感想文の部

最優秀賞

「ベルナのしっぽ」を読んで

建築学科1年 小泉 友伽菜

私が好きな本に、「ベルナのしっぽ」という本が

あります。この本の著者は、郡司ななえさんという方で、郡司さんは、ベーチェット病によって二十七歳で失明してしまった人です。

私がこの本と出会ったのは、中学一年生の時、たまたま立ち寄った本屋で親に買ってもらったというものです。しかも、手に取った理由が、その本の表紙にかわいい犬の絵が書いてあったからという、気まぐれな出会いだったのです。

読み始めて、最初に思ったのが、目の見えない郡司さんなりの目線というか、とらえ方の表現があっ

て、読みやすいということです。例えば、盲導犬ベルナと出会う場面では、犬の、「ハアハア」という息づかいや、足をバタバタさせている気配といった表現です。普通に、目の見える人だと目で周りを見渡すことで状況を把握すると思いますが、目が見えない場合、耳や肌で感じることで状況を把握するしかないのです、すごく大変だと思いました。

そして、実はもともと犬が苦手だったと言う郡司さんに、トレーナーの人が、

「ベルナの口の中に手を入れてみて下さい。」

と言いました。郡司さんは驚きましたが、

「ここまで来たのならやるしかない。」

と心に決めたようで、思いきって手をつき出したのです。しかし、決心した郡司さんに対し、ベルナの方は落ちついていました。私は、この場面を見ていて、やはり盲導犬として訓練された犬は違うなと思いました。このことで郡司さんは、ベルナとうちとけることができたと言っていました。

パートナーが紹介された後には、四週間の訓練が待っています。その内容は、実際に街中を盲導犬といっしょに歩くもので、私には簡単そうに聞こえたのですが、意外と難しいらしく、犬が盲導犬として仕事をする時に付ける、ハーネスという道具を持って歩く時、犬の歩く速度に合わせて、早すぎず、遅くならないようにしなければならないなど、人と犬が心を合わせる必要があるのです。犬が、パートナーの指示通り行動しなかったりすると、チョークと

いって、

「ノー（いけない）」

と言いながら、引き綱を瞬間的に思いきり引くことをして、犬にそれを伝え、改善していきます。逆に、きちんと指示通りに動いてくれた時には、よくやってくれた、ほんとうに助かったよと、頭をいっぱいなでてやるのです。

これらのことで、ハーネスは、目の見えない人と犬の気持ちを通わせる、とても大切な役割を果たしているということがよく分かりました。

郡司さんとベルナは、それから訓練も無事に終わり、生活していくのですが、その中で、店に入ろうとした時、店の人に、

「犬はお断りします。」

と言われて、店に入ることができなかったことなど、周りの盲導犬に対する理解がなかったために大変な思いをしたことを郡司さんは書かれていました。特に私が信じられなかったことは、郡司さんとベルナ

が信号を待っていた時の話です。その時、郡司さんが気づかないうちに、誰かがベルナの横腹に火のついたタバコを押しつけ、ベルナが火傷をしたのです。しかし、とても痛い思いをしたはずなのに、ベルナは騒ぐことや、タバコを押しつけた相手にほえることもなく、ただ、

「ヒー」

と小さく鳴いただけでした。こんな状況でも、目の見えない郡司さんを盲導犬として誘導するという大切な仕事をするために、じっと耐えていたベルナに、私は驚かされました。

この本で、一番心に残っている言葉は、郡司さんが言った、

「目は見えなくても、心の目があれば、大丈夫。その心の目が大切なんです。」

この言葉を見て、納得しました。私たち、目の見える人間は、ついつい目に見える部分だけでいろいろな事を判断してしまいがちで、本当に大切なものを見逃してしまう時があるのだと思いました。この本を見る度に、大切な事をあらためて、思い起こさせられます。

今まで、盲導犬とそのパートナーについては、学校の教科書で習う機会はいくらかありました。私自身、知っていたつもりでしたが、実際には知らないことばかりだったんだと思ったし、これからも、もっと知っていきたいと思いました。この本に出会えて良かったです。

優秀賞

「天国で君に逢えたら」

電気情報工学科1年 堀越 絵廉

この本を読んだ時、小説に出てくる手紙がガンで亡くなった、作者の飯島夏樹氏が家族に伝えたいメッセージのように私には思えた。そして、私は飯島さんがこの本を通して自分の死に対する思いを伝えていると感じた。飯島夏樹氏にとって死とは、ガンによる死とは。

ガンと宣告を受けた場合、死までの準備期間が与えられたと考えた方がよい。その準備期間にいろんな思いが出てくるはずである。ガンの宣告が驚きとなり、そして驚きが恐怖となる。やがてその恐怖が

絶望になる。しかし、絶望にまでたどりつくと、残された人生をいかに生きればよいだろうか、というほのかな希望に変わるのではないだろうか。家族とどう過ごしていくか。また、残された人生を自分なりにどう過ごせばよいのか。そう考えられるようになった時、残された人生のすべてを受け入れ、死への準備を始める。

プロサーファーのシュージが妻のリサに宛てて書いた手紙の中に、「ガンは進行が早く、見つかったときは手遅れ。(略) 三十半ばにして…。まだ人生の折り返し地点にも達していないのに、何で俺が死ななきゃいけないんだって憎しみや怒りが湧いてきた。(略) しかし、運命っていうのかな。」という文が出てくる。この手紙から「もう自分は死へ向かっている。分かっているがそれを受け入れたくない。でも、これが自分の運命だとしたら、それから逃れられるはずがない。どうすれば素直に死に向かい合うことができるのだろうか。」というシュージの心の叫びが聞こえてくるような気がする。これこそ主人公の純一が願っていたような「死の迎え方」を表している。

飯島夏樹氏は、自分の置かれている現実を客観的に見ようと、努力していたのではないだろうか。死を迎える、という事実は、若い作者にとっては受け入れることができないのも当然である。だが、彼はあえて自分の感情を押さえてシュージに代弁させたのだ。飯島夏樹氏はとても強い人だと私は感じた。

しかし、辛いのは作者の飯島夏樹氏だけではない。飯島氏の家族もとても辛いのだ。そして、家族の辛さを誰よりもよく分かっていたのは飯島夏樹氏だったのだ。

本に出てくる手紙の中にシュージの妻リサが主人公の純一に手紙を書いている。その手紙にはシュージに対するリサの思いが書いてある。「彼からあの手紙を渡された時は、正直とってもびっくりしました。彼の余命が短いことの驚きにも、勝るとも劣らないほどの衝撃でした。(略) 目は落ち窪み、体重も減り、明らかに体調は悪そうでした。病はすぐにも私たち親子の前から、彼を連れ去りそうでした。しかしなぜだか、彼は今までにないほど穏やかな表情で、私たちに接したのです。(略) 何でもうちょっと、あと十年、いや五年、三年でもいい、シュージは一緒にいてくれなかったのかと…。」という文だった。私は手紙を読んでリサが飯島氏の奥さんのように感じた。作者は病気を受け入れることができ

る。では、妻はどうだろう。深い悲しみにくれ、ただ見守ることしかできない。そして、飯島氏はただ見守ることしかできない妻にどうすることもできない。だから飯島氏は、リサという人物を使って妻の気持ちを想像し、妻の気持ちになってみて、妻からの深い愛情を感じたのではないだろうか。そして飯島氏も妻の大切さを感じることができたのではないだろうか。だからこの手紙はリサからシュージへの手紙だが、飯島氏が「辛い思いさせてごめん。でもあなたがいたから私は病気に立ち向かうことができるのだ。」という妻へのラブレターではないだろうか。夫と妻の信頼関係、愛情関係を感じることができた。

私には、夫と妻との関係はよくわからない。しかし、人と人との関係はわかる。この本は、「夫と妻」は、夫婦である前に、まず「人と人」としてつながりをしっかりと持たなければならないことを私に教えてくれたように思える。私もいつかこのような人間関係を築いていきたい。

「キッチン」を読んで

電気情報工学科1年 前田 果澄

大切な人の死。そこからはじまった突然の奇妙な同居。その中で「もっと強くなろう」と思って頑張っていく。この物語は、「死」を取り扱っているにもかかわらず、とても後味よく読むことができました。それは、著者である吉本ばななさんの表現がとても素晴らしいからだと思います。中でも私は、「涙があんまり出ない飽和した悲しみにともなう、柔らかな眠けをそっとひきずって、しんと光る台所にふとんを敷いた。」という一文がすごいと思いました。このシーンは、主人公であるみかげの祖母が死んでしまったところです。それにもかかわらず、読んでいると嫌な感じがまったくしないのです。人が亡くなって、とても悲しいという気持ちがすっきりと読みとることができたのです。

しかし、この物語の中ではいくつか私の中で納得のできないところがありました。それは、「幸福とは、自分が実はひとりだということを、なるべく感じなくていい人生だ。」という文章です。確かに、誰もがみんなに認められて、ひとりだということを感じずに生きていけたら、幸福だと思うこともあると思いました。ただ、それでは自立ができないのではないかと思います。これでは、自分のために

しか生きていないと考えられます。それに、私は人生がそのようなものではないと思います。ひとりだということを感じているときでも幸福は感じるし、この文章のとおりだと、私は少しおもしろくないと思います。

ただ、このように納得のいかないことばかりがあったわけではありません。とても共感のできるところもいくつかありました。それは、「どうしても、自分がいつか死ぬということを感じ続けていたい。でないと生きていく気がしない。」という文章です。私は、「死」について考える時、必ずセットで、「生」についても考えます。この二つは表裏一体だと思います。生きているからこそ死がやってくるのです。こう思うと、やはり生きていくと感ずるとき、死が近くにあったから、死ぬほど怖い思いをしたからなど死を少しでも感じているからだと思います。

この「キッチン」は、読み終わると、なんとも暖かい気持ちになることができました。今まで、ここまで真剣に生きること、死ぬことについて考えたことのない私には、とても新鮮に感じられました。死は、当然くるもので、それは受け入れなくてはならないとただぼんやりと考えただけでした。しかし、今はもう少し深く、重く考えることができます。また一つ人の気持ちについて、複雑なのだと感じることができました。私はまだ、とても大切な人を失ったことはありません。だから、この本を読んだことをいかして、悲しいという気持ちに負けず、そこから成長していけるようになりたいと思いました。主人公のみかげと同じように、強くなり、成長し、色々なものをみつめられる。そのように生きていきたいと思いました。

「人間失格」を読んで

電子制御工学科1年 盛山 竜之介

この夏、僕が読書感想文を書くにあたって読んだ本は、太宰治の「人間失格」でした。

僕がこの本を選んだのは、何も始めからこの「人間失格」を読みたいと思っていた訳ではありませんでした。

きっかけは、僕がいつだったかテレビを見ていて、その中で「太宰治の作品は、まるで自分だけに話しかけられているように感じる」ので、太宰治に特別な親近感を覚え、太宰治は自分と同じだという同志感

さえ覚える。」というような事を聞いた事と、本屋に行った際に「人間失格」が「今、一番売れている本」という中の第一位にあったので、「そこまでおもしろいなら読んでみよう。」と思った事が、この本を選んだ理由でした。

この本は、「恥の多い生涯を送って来ました。」という言葉から始まる手記について書いてあります。この手記は、主人公の生涯について書いてあり、大まかなあらすじは、主人公は人間としての営みや、幸福、隣人の苦しみの性質や程度などが分からない故に、「道化」を演じる事で自分の本質を偽り、周りの人達を欺きながら生きていくが、取り返しのない過ちを犯してしまい、最後には自分で人間として「失格」との判定を自らに下す、という内容です。

この本を読み終えて一番最初に感じた事、それはこの本を読むきっかけとなった、自分ではない人達が読んだ時の感想、つまり「太宰治への親近感、同志感」でした。この本を読み始めた頃は、親近感、同志感なんてものは、一切ありませんでした。むしろ小難しい人だな、という感想が一番大きかったです。しかし、読み進むにつれて「自分も太宰治と同じ様にして、自分を偽り、人を欺いている。」というような思いが強まってきました。

自分にも、周りの人達が何を考えているかが分からなくて、もしかしたら自分のような人は嫌いなのではないかと、という怯えに屈し、良い人のような態度を取ったり、自分が他人の本質を知りたくないが為に、周囲との付き合いなどを自分から避ける。しかし、それらが全て演技だとばれてしまえば、周りの人との付き合いが浅いが為に、その人が自分の事をばらすのではないかと、思いそれを防ぐ為に、今度はその人となんとか仲良くなろうとする。人の本質が見たくないが為に付き合いを避けるのに、自分は本当に良い人なんだ、と周りにアピールする為に演技を続けながら、絆を強めようとする。そんな矛盾した行動をするのは、ひどく滑稽に見えて自分は何をしているんだ、などと思う事があり、これは、太宰治とまったく同じではないか、という「共感」を感じた事が今でも強く印象に残っています。

僕がこの本を読んで、一番心に残った場面は、この本の題名とも言える、主人公が自分に人間として「失格」の判定を下す場面でした。これは、薬物中毒になった主人公が、周りに「狂人」と思われて脳病院に入れられてしまった後にある場面であり、主

人公はその病院の中で三ヶ月程いた、とありますが、その時の主人公の気持ちなどについては、まったく描写されていません。あるのは、病院の庭の花の事だけです。なぜ何の描写もないのか。病院に入る前には、生への希望を失い、自殺しようとする程の「絶望」があったはず。自分は狂人ではない、と言っても信じて貰えない事の「悲しみ」があったはず。それなのに何も無いのは、「絶望」や「悲しみ」以上の「無」の感情があったからなのでは、と僕は思いました。自分がいつ死ぬだとか、自分が信じて貰えないだとかそんな事は関係無い。なぜなら自分は既に、「人間失格」なのだから、という思いがあり、あえて何の描写もなかったのだと思い、このように、なぜ、と考えさせられたこの場面がとても気に入りました。

僕はこの本を読んで、人と人との触れ合いについて考えさせられました。

皆さんも、人としての考え方、人として生きる意味について考えてみたくなったのなら、「人間失格」を読んでみてはいかがでしょうか。

佳作

「そして誰もいなくなった」

電子制御工学科1年 濱田 三奈美

私はアガサ・クリスティー著『そして誰もいなくなった』という本を読みました。

それぞれ見も知らぬ、様々な職業、年齢、経歴の十人の男女（男性は七人、女性は三人）がU・N・オーエンと名乗る一人の男からの招待状をもらい、デヴォン州沖にある『インディアン島』へと向かっていた。不気味な、岩だらけの孤島だった。やがて一行は豪華な大邸宅へとついたが、肝心の招待主は姿を見せず、そのかわりに見事な食卓が彼らを迎えた。不審に思いながらも十人が食卓についたとき、どこからともなく古い童謡が響いてきた。続いて、十人の客たちの過去の犯罪を、一人ずつ告発していく不気味な声が…。その後次々と十人しかいないはずの島で死んでいくというミステリー小説です。

この小説を読んで思ったのは人間の中の黒く醜い部分がハッキリと書かれていて怖いということです。海が荒れ、助けを求める信号が発信出来ない、嵐が

続く為船が来ない中で次々と死んでいく人々。想像しただけでもかなり怖いと思いました。さらに殺され方には特徴があります。それは童謡。

十人のインディアン少年が食事に出かけた。一人が咽喉をつまらせて、九人になった。

九人のインディアン少年が遅くまで起きていた。一人が寝すごして、八人になった。

八人のインディアン少年がデヴァンを旅していた。一人がそこに残って七人になった。

七人のインディアン少年が薪を割っていた。一人が自分を真っ二つに割って、六人になった。

六人のインディアン少年が蜂の巣を悪戯していた。蜂が一人を刺して、五人になった。

五人のインディアン少年が法律に夢中になった。一人が大法院に入って四人になった。

四人のインディアン少年が海に出かけた。一人が燻製のにしんにのまれ、三人になった。

三人のインディアン少年が動物園を歩いていた。大熊が一人を抱きしめ二人になった。

二人のインディアン少年が日向に坐った。一人が陽に焼かれて、一人になった。

一人のインディアン少年が後に残された。彼が首をくくり、後には誰もいなくなった。

という童謡。この歌の通りに殺されていく十人の“インディアン”。さらに食卓には十個のインディアンの人形…それは一人殺されるたびに一個無くなる。私はその島にもし行っていたら、多分気が狂うと思います。確かに十人しかいない孤島で誰が犯人かわからぬ中一週間も過ごせない…。U・N・オーエンが誰かすらわからない。もしかしたら自分以外みな嘘をついているかもしれない。信じられるのは自分だけという極限の恐怖の中で生き残って帰れる？と問われれば即答できます。無理。絶対無理。食料が充分あっても死ぬ。自分の人生をこれほどにもないくらい怨むと思います。どんなにインディアン島がキレイでも、どんなに大豪邸でもお断りします。それだったら小さなボロ家で貧乏でも構いません。むしろそっちの方が良いと思います。

しかし、この小説の怖い所はそれだけではないと思います。私は人間も怖いと思います。あまりの恐怖のために気が狂い訳のわからぬことを言い出す人や、他人が犯人であると決めつけ疑う人、そういう黒くてどろどろした部分が現れ精神的にも殺されてしまうかもしれません。自分だけは生き残りたいから他人を殺してしまうかもしれない…。何より人間

の心が怖いことをアガサ・クリスティーは伝えたかったのかなと思います。

この小説ではタイトル通りに十人は全員殺されてしまい、誰もいなくなります。このときに一体犯人は誰だろう？どうやって全員を殺したんだろう？とすごく気になりました。読んでる途中から気になりました。はやく刑事さん解決しろ!!と思ったのですが…刑事さんはこの事件を解決させることができていません。私は一瞬「うおっ!!」ってなりました。普通のミステリー小説ならば探偵がいて、事件をズバッと解決するはずなのに。アガサ・クリスティーは焦らすのが上手だなと思いました。普通のミステリー小説と違って面白いなと感じました。

もちろん、犯人が誰なのか、どんなトリックかは最終的にわかります。どうやってわかったかは自分で読んでください。とってもユニークで想像力が豊かだなと思えるくらい驚きました。(感じ方には個人差があると思いますが…)。まるで自分が経験したことがあるようなリアルな感情を表していて不思議と吸い込まれる小説でした。アガサ・クリスティーは本当に人間なのか?と思ったほどでした。

「ポプラの秋」を読んで

物質工学科1年 才原 知里

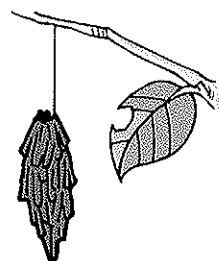
十八年前、父の死をきっかけに行き当たりばつりの電車ツアーで見つけたポプラ荘。そこの大家のおばあさんはもうじき七歳の主人公、千秋には近寄り難く不気味でした。

千秋がおばあさんを恐れたのは、おばあさんが最初、アパートに子供は駄目と言ったのが決定的だったかもしれませんが、私は千秋の幼さと純粋さからだと思います。その時の千秋には外の世界の全てが怖いというか、油断などできないように思えたのだと思います。千秋が世界中で信用していたのは、多分自分と母だけだったんだと思います。しかし、母を心配させないように、落ち度がないようにいつも緊張していました。幼い千秋にはどうすることもできなくて、抜け出すことができなかったんだと思います。そんな千秋がかわいそうでした。

千秋は体調をくずして、昼間はおばあさんが面倒を見てくれることになりました。おばあさんは千秋に約束をしました。自分が死んだ時、棺に亡くなった人への手紙を入れてあの世でその手紙を届けると。

千秋はお父さんに手紙を何枚も書きました。それから十八年経った千秋には、その約束は自分を元気づけるためのやり方だったと考えていました。幼い時、周りが自分のために大人達がさりげなくしてくれていたことを大きくなってから思い返すと嬉しくもなりますがそれ以上に自分は自分が思っている以上に守られているんだと思います。小さい時は約束は絶対にやぶってはいけないものでした。成長しても守っている約束や、約束を絶対に守っている人もたくさんいると思います。だけど、約束をやぶったこともやぶられたことも、ごまかしもたくさんあると思います。私は約束をやぶったこともやぶられたこともありますし、自分の気づいていないところでやぶった約束、やぶられた約束もあると思います。人が約束をやぶるようになるのはちょっとした約束をこれくらいなら守らなくても大丈夫だろうと思うようになるからかもしれません。そう考えると時が経つのは早いし、儂くも思います。千秋は、おばあさんのお葬式に行った時、棺の中のたくさんのおばあさんの手紙を目にします。私は嬉しいような少しホッとしたような感じでした。そして、約束を守ってくれたおばあさんに感謝したくなりました。

千秋はポプラ荘から遠くへ引っ越してから一度もおばあさんに会いに行きませんでした。そのことを千秋は後悔します。大人になってからなら行こうと思えば行けたのにと。人には自分が思っているよりもたくさん大切なものがあるのではないのでしょうか。でも、なかには大切なものだと気づいてないものもあると思います。それに、目の前のことでいっぱいいっぱいなことも多いと思います。でも、失ってから大切だと気づくのがあまりに多いと悲しいと思います。だから、私は自分の大切なものや、周りの人達や、近くではなくて遠くにいる人達やものを大切にすることを、大切に思うのを忘れないようにしたいと思いました。千秋も最後はなんだか気持ちが軽くなって希望がうまれたような感じでした。自分はまだ生きてるんだからと。きっと人生はあっという間です。私がかもっともつと年をとって、振り返った時に色々あったけど楽しい人生だったと思えるように生きていきたいとこの本を読んで思いました。



「たまごを持つように」

物質工学科1年 野見 昌史

読書感想文の推薦図書の一覧が配られた時「たまごを持つように」というタイトルは、一際目立っていた。図書館で表紙の絵を見た瞬間、タイトルの意味が理解でき、興味が湧いたのでこの本を選んだ。

この本は、一言で表すと弓道の話だ。主人公の伊吹早弥、天才肌の松原実良、そして外見の違う石田春フィリップアンダーソン。中学弓道部の男女三人が心を通わせていく物語である。

早弥だが、突然団体戦に出る三人に選ばれてしまう。実力では、先輩と他の二人の方が上なのに実良が外されたのだ。早弥は、自分には荷が重すぎると悩んでしまう。

僕は、卓球部で弓道とは縁もゆかりもない。しかし、一応共通点がある。それは、どちらにも団体戦があることだ。団体戦は、一人でもミスをするチーム全体が危うくなる。個人戦でもそうだと思うがプレッシャーは団体の方が大きい。その上、弓道では後から追い上げたり出来ないのも更に重圧は重だろう。自分も今、団体のメンバーになったら早弥のようになってしまうだろう。

そして早弥は、握卵を実践し始めた。弓はたまごを持つように握るからそう呼ばれる。それが上手く出来ない早弥は、うずらの卵を本当に使って練習したのだ。

僕は、この握卵という言葉が好きになった。無駄な力を使わないというのは握り方に限らず、あらゆるスポーツで大切なことだ。僕は、この言葉を大切にしていきたい。本当に卵を握っていたのは、実良に笑われていたが僕は素直に凄いと思った。中学生の時の僕は、サポートしたことこそなかったが、練習中に笑ったり話したりしてあまり頑張っていなかったし、部内ではそこそこ強かったためレギュラーを取るために特別努力した訳でもなかった。

しかし、早弥は人一倍努力して上手くなった。試合でも、県大会優勝に一役買っていた。僕も、いつまでも焦っていないでいい結果が出せるように努力しようと感じた。

春だが、彼はアフリカ系のハーフで、黒人が弓道をやっているのが珍しいため九州大会には新聞記者まで来た。そして、その時のインタビューで、「武とは戦いを止めるという意味」と言った。

この春の言葉は、思わず膝を打った。確かに、「武

には「止」という文字が入っているからだ。武道の中で剣道には活人剣があり、まさしくこれは戦いを止めるためのものだろう。この言葉が、核をちらつかせて各国を脅す北朝鮮や大義のためなら死も辞さないテロ集団等に伝われば良いと思ったし、日本も自衛隊の使い方を間違えたりしないように心に刻んでおきたいと思った。

実良が団体戦を外されたのは、スランプに陥ってしまったからだ。それまでの、美しい動きが嘘のように殆ど当たらなくなった。

僕は、中学生の時にテスト明けによくスランプになったとか言っていた気がするが、あれは体が鈍っていただけで、騒いでいた自分が恥ずかしく思えた。

何とか感覚を取り戻そうと矢数を重ねるが実良は元に戻れず、苛立ち、皆ともぎくしゃくし、終には髪を茶色にしてしまう。

事が思うようにいかないと人は苛立っていく。前に出来たことなら尚更だ。今後、僕も実良のような状況に陥るかもしれない。実良のように足掻いてみるべきなのか、淡々とその時が来るのを待つべきなのか、今の僕には分からない。その時に、じっくり考えれば良いだろう。

監督が倒れた後、実良は変わった。頭を坊主にした。元彼に土下座して謝った。そして、感覚が戻ってきた。

人が変われるきっかけというものはどこにあるか分からない。しかし、それをものにできた実良は凄いと思う。

そして、三年目の夏。九州大会に再び。最後の競技は団体戦だ。

この場面だけ、早弥、実良、春それぞれの視点で描かれている。心が通じあったことが分かる表現だ。

最後のページの後ろから二番目の文は、そうかもしれないと感じた。米子高専の卓球部が優勝した時は、ハイタッチや胴上げで喜びを分かち合った。いつかは、選手としてあの中へ入れるように努力しようと思えた。

この物語は、他のスポーツを題材にした小説よりもミスの描写が多かったと感じた。弓道が精神力や集中力など心が大きく影響するからだと思う。弓道が立禅と呼ばれる理由はここにあるのだろう。武道についての考えがこの本を読んで少し変わった。弓道や剣道には派手さがあまりないが卓球も同じようなものだ。それなら、共通項はもう分かっている。やって楽しいから続けられるのだ。

エッセイの部

最優秀賞

挑 戦 者

物質工学科1年 香川 奈緒子

午後、祖母の家で目覚めると、テレビ画面がやたらと騒がしかった。大きな画面に目をやると、澄んだ青空の下小さく揺れる青いメガホンの群れ。大勢の観客たちの大きな声援が、それに相応しいBGMとなって大空高く響き渡っていた。それが夏の甲子園だということを理解するのに、そう時間はかからなかった。“さっき野球の夢を見たのはこのせいだったか”と一人頷き、野球に興味のない私は畳に転がるリモコンを手を取った。

「これ決勝戦だし、最後まで見たいわ。」
私の意図を察したのであろう祖母の言葉が、私の手の力を緩めさせた。リモコンをそっとテーブルに置き、携帯電話をかまいながら試合終了を待つことにした。ちらっと画面を見ると、中京大中京高校のエースが「今から投げるぞ」と言わんばかりに前方を真っ直ぐに見据えて、胸の前で白球をしっかりと握りしめていた。カメラがアップで映したその鋭い視線に、ドキッとした。私の両目は、ただならぬ雰囲気にも包まれた彼をしっかりと捉えて離さなかった。次の瞬間、白球は彼の手からすっと離れて、スピンしながらキャッチャーのグローブの中に収まった。観客席から、どっとどよめきがわいた。

「フォアボールでバッター一塁!」
実況席は冷静だった。右下のスコアに目を移すと、10対4でツーアウトという表示が出ていた。私はその時やっと、これが9回表、日本文理高校の最後の奮闘だということに気がついた。たった数秒間の内に、私は画面から目が離せなくなってしまっていた。流れる実況は、心なしかこの奮闘を諦めているように思わせた。実況席だけではない。“あとワンアウトで試合終了なのに…”観客席からもそんなじれったさを感じた。だが、日本文理高校の選手たちが諦めていないのは、カメラが彼らを映した時一目でわかった。彼らの瞳の輝きからは、諦めなどという言葉は微塵も連想できず、それどころか残りわずかなチャンスへの期待と希望で満ち溢れていたのだ。

紛れもなく、挑戦者の顔だった。何かが起きる気がして気持ちが高ぶり、無意識に笑みを浮かべる自分に気づき、一呼吸おいてから静かに眼鏡をかけた。

奮闘は続く。次々と交代するバッターは、ツーアウトというプレッシャーを背負いながらも、その表情からは力強い自信と、凄まじい集中力が感じられた。ツーアウトツーストライクという厳しい状況からの素晴らしいスウィング等を経て、二点を返して10対6とし、中京大中京高校に大きな圧力をかけた。気がつけば塁は満たされ、ホームランを放てば同点というところまで追いこんだ。観客席からの大コールに応えるように放ったバッターの渾身の左前打で、二人が全速力でホームに帰ってきた。その光景に興奮していたのは、もちろん私だけではなかった。観客席も実況席も、その驚異的な粘りに圧倒されているようだった。実況は声を裏返し、観客席では叫びと沈黙が交差していた。青いメガホンたちが喜びのダンスを踊る中、誰もが夢中になっていた。役目を終えてベンチに戻る一人の選手の間からは、やり切った満足感と安堵の思いからか涙が流れていた。よほどのプレッシャーだったのだろう。不安や緊張や、一打にかける強い思いが一気に溢れ出した様子で、それが画面越しに伝わってきて胸がいっぱいになった。気づけば、胸の前で手を組み、大きな声で応援している自分がいた。その後間もなく、日本文理高校は更に一点を返し、10対9と一点差まで追いつけた。予想もしなかった展開に皆興奮がおさまらないようで、そこに“諦める”という言葉は見当たらなかった。誰もが、同点もしくは逆点を思ったとき、突然試合は終了した。今までにない大きな歓声と試合終了のサイレンが、握手を交わし合う両校の選手たちを包み込んだ。そして、画面には面白い光景が広がっていた。やっとの思いで勝ち取った日本一に、感極まって涙する勝者中京大中京高校。対して、信じられないほどの追い上げを見せ、感無量といった表情で最高の笑顔で抱き合う敗者日本文理高校。勝者が涙し、敗者が笑う。それが、今回ばかりはとて新鮮だった。青いメガホンたちは言うまでもなく両者を讃えていた。球児たちの背中がやけに眩しく感じられ、不況、不況と嘆き下を向くこの日本も、まだ捨てたものじゃないなと思った。そう思わせてくれる程、熱く、夢のある闘いだったのだ。

泣く程頑張るといふこと、そして最後に笑えるくらい、諦めず一生懸命になるということ。その素晴らしいさを、彼らは教えてくれたように思う。

「高校野球、こんなに泣けるものだったのか…。」
一人呟き、溢れ出す涙をそのままに泣きながら、私は力の限り拍手した。BGMは、中京大中京高校の校歌に変わり、大きく広がる空は、彼らの青春を象徴するかのように、どこまでも青かった。私は胸中に静かに押し寄せる何かに微笑して、少し濡れた眼鏡を、ゆっくりと外した。

優秀賞

おばさんの手

電気情報工学科1年 小倉 脩平

この出来事は、六月の初めの頃、いつも通り電車で家にむかっている最中の事でした。僕は同じクラスの友達と席に座っていました。汽車の座席の形はボックス型で、僕と友達が向かい合うように座っていました。いつものように、しょうもない話で盛り上がっていると、隣のボックス型の座席に五十歳くらいの夫婦が座っているということに気がきました。その二人をチラッと見ると、向かい合うのではなく、二人は隣同士で座っていました。その時、女の人と目が合ったような気がしたので、すぐに視線を戻し、友達との話を再開しました。数分後、何か視線を感じ、左を見ると、先程のおばさんがこっちを向いてペコペコと頭を下げてきていました。僕は、訳が分からなかったのですが、そのおばさんを見無視していました。それから三駅くらい過ぎた頃、もう一度おばさんの方を見てみました。すると、まだこちらを見て頭をペコペコと下げているではありませんか。不気味に思い、友達にそのことを話し、確認をしてみました。どう見ても、自分達の方を見て、自分達へ頭を下げていました。ですが、僕達は頭を下げることなく、「何か用かな〜。」などと話を続けていました。終点も近くなり、荷物を持つかと思ったとき、まだ、あのおばさんがこちらに向かって頭を下げているのに気がきました。僕は、意を決しておばさんに一礼返しました。すると、おばさんの表情は少しずつ笑みに変わっていき、こんなことを言いました。「ずっとごめんなさいね。あなたが私の息子にあまりにそっくりだったから、つい見てしまったの。あなた（僕の友達）は笑顔が可愛らしくて…。」おばさんは一瞬悲しそうな顔をしながらもそう言い

ました。僕達はただ笑顔でうなづくことしかできませんでした。少しでもうっとうしいと思った自分が急に恥ずかしくなりました。おばさんは何度もごめんねと繰り返し、息子に似ていたから、つい…と何度も何度も言っていました。

そして、電車は終点に着き、そのおばさんは僕達より先に降りていってしまいました。僕達も電車から降り、改札口の方へ向かおうとした時、あのおばさんが少し前でこちらを見つめ、止まっていた。そうです、おばさんは僕達を待っていたのです。おばさんの近くへ行くと、おばさんは、

「握手してもらえない？イヤだったらいいの、出来ればでいいの。」

と言ってきました。僕達は、もちろん握手を了解しました。

『ギューウ。』

僕達は、おばさんと強く、そして優しい握手をしました。おばさんの手はとても温かかったです。手を離れた時おばさんの目には、きらりと光る液体が溜まっていた。それは今にも溢れ出しそうなくらいでした。おばさんは何度も何度も頭を下げ、ありがとうと言っていました。去って行くおばさんの後ろ姿を見ていると、どこか寂しくそしてとても穏やかな優しい気持ちになれました。今でもおばさんの後ろ姿は鮮明に覚えています。

走 る

電子制御工学科1年 西村 康祐

僕は、走るのが好きだ。いきなり何を言い出すんだ、と思う人もいるだろう。これにはちゃんとした理由がある。走るのが好きだ、そう感じたのは中三の夏だった。

中学の時、僕は陸上部に入っていた。その中でも長距離に所属していた。そして、夏になると駅伝の練習が始まる。僕は、この駅伝の練習が毎年楽しみだった。とても楽しくて、夢中になっていた。

だけど、中三の夏は少し違っていた。何が違うか具体的に言うと、気持ちだ。あれだけ夢中になっていたものなのに、真正面から向き合えない、逃げて逃げて、どこまでも逃げ続けたんだ。そのクセなぜか練習には毎日参加した。でもそこには、練習に参加できない僕がいた。一生懸命頑張っている皆を見るのが、死ぬほど辛かった。

もう、練習なんか行きたくなかった。行っただってどうせ走れないし、皆の足を引っぱるだけだし。そんなことばかり考えていた。日増しに、その辛さが増していった。

もっと速く走りたいと思っても、速くなるどころか、タイムは下がる一方。それどころか、走ることさえ、できなくなってしまった。

もう、全てが嫌になる自分がいた。こんな気持ちを誰にも言えるはずがなく、気付いたら顧問の先生のところに、退部届を提出していた。その先生は、駅伝と陸上の顧問で、両部活とも三年間お世話になった先生だった。先生は、もうそろそろ出しに来るだろうな、と気付いていたらしい。だったらもう辞めることができるんだ。もうあんな苦しい思いから開放されると、ちょっとした期待と、安堵した自分がいた。でも、そんな僕に、

「認めん。」

先生はハッキリ言った。僕の頭の中は真っ白になっていて、呆然と立ちつくしていた。そんな僕に先生は続けてこう言った。

「おまえなあ、何言ってるの。辞めたいので辞めます。と言われて、それを認めると思ったか。そんな甘い考えで今までやってきとったんか。ただ逃げとるだけだろ。」

そこで僕はカッとなった。

「あんたに何が分かるって言うんだよ。人の気も知らないクセに、どんだけ悩んでここに来たと思ってんだよ。もうあんな恥かきたくねえんだよ。」

言ってしまった。先生に対して、よくあんた呼ばわりなどできたものだ。今になると、とても恥ずかしい。謝りたい。

でも、あんなこと言った僕に先生は、

「恥ぐらい、いくらでもかけばいい、泥なんていくらでもかかっちゃまえばいいじゃないか。おまえのヤル気はそんなもんじゃないだろ。最後ぐらい、完全燃焼して終われ。それまでちゃんと見届けてやる。自分自身、今までやってきたことを信じてみる。必ずやり遂げられる。」

そう言ってくれた。なんだか嬉しくなって、その後は何も言う事ができなくて、ひたすら泣いた。自分が一番欲しかった言葉をその先生はくれたんだ。書きつくせないほど、たくさんの言葉をくれた。

その後、普段通りに練習に行くと、皆が、励ましの言葉をくれた。その中の何人かは、一年生の頃からいっしょに頑張ってたヤツだった。先生のところ

で、大泣きしたのに、また泣きそうになってしまった。ずっと一人で悩んでたから、皆の優しさが、こたえた。

そんなこんなであつという間に駅伝大会の前日になった。その日には、選手のメンバー発表があった。あの日から人が変わったように練習に明け暮れていた僕には、自信があった。でも、結局選ばれなかった。必死に悔しさを嘔み殺し、涙をこらえた。発表が終わり急いで帰ろうとした僕を先生は呼び止めた。呼び止められて、後ろを振り返るとそこに先生以外にも二、三人、先生が残っていた。周りには、僕以外、誰もいない。全く状況が分からず困っていた僕に、先生は、涙をこらえて誉めてくれた。そして、「ごめんな。頑張ったけど、おまえを選手にしてやることができなかった。ほんとにごめんな。」

先生は、何度も何度も謝ってきた。

僕はその言葉で一気に泣き崩れた。溢れ出す涙を必死でこらえて、何も言えなかった。ひたすら首を横に振っていた。

その時、僕は思った。やっぱり走ることが好きだって。走るってすごいなって。走るだけで、こんなに感動できるんだって。

あの先生には、とても感謝している。今の自分があるのは、先生のおかげだと思う。

だから僕は、ずっと走り続ける。速いか遅いなんて関係ない。大事なものは「気持ち」だってことが分かっているから。

先生、ありがとう。

佳作

甲子園予選

ぼうず

今年の夏、布施総合運動公園で鳥取県の高校野球の甲子園予選があった。これまでの練習の成果を発揮する場所だ。

開会式。全二十五校が出揃った。色々な話を聞いてやる気が出てきた。そして同時に、甲子園に出てやろうという思いが強くなった。

一回戦の相手は、鳥取工業高校だ。前日にビデオで研究し、相手の特徴などを探った。旅館では、早めに寝た。試合前の練習では、ランニング、ストレ

ッチ、キャッチボール、トス、ゴロ捕球、スイングをした。球場に向かうバスの中でも、着いてからも緊張はしなかった。「できる」という詩を読み、一気に思いが高ぶった。試合前、円陣を組み、全員が大声を出して、やる気を最高にした。そして、ついに試合が開始された。ショートのリギュラーの人が大会前にけがをしたから、自分がスタメンで出る事になった。高専が先攻だった。序盤は、あまり緊張はしなかった。しかし、夏を戦った事のない自分は体力がなく、少しきつかった。七回が終わった時点で4対1で勝っていた。八回裏、自分のエラーで出したランナーがえって一点を取られた。その時から、緊張が半端ではなかった。九回裏、ランナーがたまって、ショートに打球がきた時、うわっと思った。何とかとったが、送球の時に体が固くなり、セーフになって、一点取られた。4対3。このまま負ければ、自分のせいだと、何回も心の中で考えてしまう。嫌で嫌でしょうがなかった。打球来るなど、心底から願った。バッターが三振で、何とかツーアウト。しかし、ランナーは、一、三塁。心臓が飛び出そうだった。バッターが打った。セカンドゴロだ。二塁ベースカバーで、「こっち、こっち」とボールを呼び、そのボールを、自分ががちりつかんで、ゲームセット。苦しくて、涙が出そうだったが、その分、勝った喜びも大きかった。球場全体に響く声で、校歌を歌った。気持ち良かった。応援してくれた人に、感謝の気持ちでいっぱいだった。

次の試合は、春にコールド負けをした、鳥取中央育英だった。その試合の前日、一生忘れる事のない事件をおこしてしまう。それは、前日の昼に自主トレを終えたころ、鳥取砂丘が近かったため、行こうとさそわれたのが、きっかけだった。歩いて行って、そろそろ帰ろうと思った時だった。鍵がない。ホテルの部屋の鍵がないことに気付いた。夕方まで探したが見つからなかった。そこで、夜に自分のせいで、全員が探すことになった。かろうじて見つかったが、もう夜は遅かった。先輩や監督にかなり怒られた。もう試合に出たくない、野球部にいたくないとさえ思った。しかし、次の朝、キャプテンにこう言われた。

「昨日の事は忘れろ。やってしまった事は、仕方ないけん、きりかえろ。だから、今日の試合は、がんばれよ。」

その言葉をもらった瞬間、涙があふれた。自分のふがいなさ、申し訳ない気持ち、そして許してくれた

先輩の優しさに、涙が止まらなかった。そこで、気持ちのきりかえが出来た。絶対に勝とうと思った。

試合が開始されて、すぐに先制した。だが、すぐに同点とされ、苦しい展開が続く。試合が動いたのは、五回表。ランナー一、三塁でバッターは、キャプテン中光さん。一振りで一点を奪った。七回裏にツーアウト満塁。ポテポテのピッチャーゴロで、ファーストに送球。きわどいタイミングだったが、アウトでチェンジ。ここを乗り越えた事で、緊張はあまりなかった。九回裏。ランナー一塁。バッターの打球は、ピッチャー正面。一―六―三のダブルプレーで、試合終了。また校歌を歌えることに誇りを持った。さらに、嬉しかったのは、米子高専の歴史初の夏二勝をあげたことだ。そのメンバーにいられたことが、とてつもなく嬉しかった。

準々決勝の相手は、米子松蔭。その試合で、心に残った事はただ一つ。それは、楽しかった事だ。守っていても、攻めていても、変わらずにその気持ちはあった。終わってみれば、3対0で負けていた。自分には、悔しいという気持ちはなく、ただ楽しかったな、という想いしかなかった。同時に、三年生の夏は、終わりを告げた。感謝したいという気持ちで、いっぱいだった。そう思うと、ようやく、涙があふれた。最高の先輩だった。

この夏、自分が学んだ経験は、たくさんある。実力だけじゃないということ。一人じゃないから、がんばれるということ。その経験は、一生の宝物だから、これからの人生に活かしていきたい。

染み渡る水のように

物質工学科1年 松村 美里

朝、けたたましく携帯が鳴った。

何事かと目を覚ますと、昨日セットしておいたアラームだった。気が付けばもう七時半になっていた。(そういえば今日は、起きる時間遅くしたんだっただ。)

そんなことを思いつつ、やかましく鳴り続ける携帯のボタンを押した。しかし、目は覚めたものの、体がだるくて起き上がるのは億劫で、うーうー呻きながらベッドの上をゴロゴロと転げ回っていた。すると下からお母さんの、

「まだ起きんのー。もう七時半過ぎたでー。」

と叫ぶ声が聞こえてきた。それに、

「もう起きとるわ。」

と返事をして、しぶしぶ起き上がる。

いつもの一日が、またいつもと同じように始まった。

母の朝からのお説教に、適当な返事をしながら、トースターに食パンを入れてツマミを二分のところまで回す。パンを焼いている間に牛乳をマグカップに注ぐと、半分ぐらいのところまで牛乳が無くなった。マグカップの縁にコンコンとあて、最後の二、三滴をカップの中に落とす。そろそろ焼け上がるころだったので、トーストを乗せる皿を出していると、チンツという音がしてトースターが出来上がりを知らせてくれた。扉を開けると、キレイなきつね色に焼き上がったトーストが網の上に乗っていた。それを皿に乗せ、テーブルを見ると、そこは本やノートに占領されていた。文句を言いながらそれらを端に寄せると、一番隅に置いてあったテレビのリモコンが落ちてしまった。面倒だったが、テレビが見たかったので床に落ちたリモコンに向かってグイーッと体を伸ばしてそいつを拾い上げると、その姿勢のままテレビに向けて電源ボタンを押した。テレビがついたので体を起こして、リモコンを本の山の一番上に置いた。テレビはニュースをしていた。ボーッとニュースを見ながらトーストを食べる。たまに牛乳を飲む。しかし、トースト半分を残し、牛乳が無くなってしまった。あとは口をモサモサさせながらトーストだけで食べるはめになってしまった。

今日は、あまり気持ちの良い朝じゃなかった。牛乳が足りなくなるし、リモコンは落ちるし。朝から気分が悪い。今から部活だと思えば気が重くなった。

着がえて外に出ると、玄関のドアで遮られていた日光が体を刺激した。それに、今日はやけにムシムシしている。自転車通学なのに日焼け止めをぬるのを忘れた。最悪の気分になった。もう部活に行くのをやめようかとも思ったが、夏休みは大会が多いので休むわけにはいかない。自転車に乗りゆっくりとペダルを踏み込んだ。道のりは向かい風である。

高専に着くと自転車置き場に自転車を置いて武道場まで歩いた。今日はいつもより武道場への道のりが長く感じる。

剣道部の練習は過酷だ。夏のムシ暑さの中でも防具をがっちり着けて冬場と同じような稽古をするのである。やる気が出ないので、今日は途中で終わって帰った。

「ただいまー。」

とは言ったものの、家には誰もいない。一人でお昼ご飯を食べたが勉強する気も起きなかったので、重

い気持ちを抱えて布団に潜り込んだ。

どのくらい経っただろう？

窓の外は既に暗く、一階からは家族の話し声が聞こえる。みんな帰って来ているようだ。なんとなく楽しそうな声だった。のそのそと布団から這い出て、一階に降りた。

リビングの扉を開けると家族がそろってテレビを見ていた。

「おはよう。」

と、笑顔が向けられる。すると父が、

「アイス食べるだろ？好きなやつ買ってきといたけんな。」

と、嬉しそうに袋を持ち上げる。妹も、

「ねー、今日部活で誉められたに。」

と、自慢げに話しながら近付いてきた。

朝、説教してきた母も、猫を捕えて、

「可愛いやー。」

とか言いながら楽しそうだ。

そんな家族の顔を見ていると、昼までの荒んでいた気持ちなんてどこかに行って、幸せな気持ちになった。

毎日なんてこんなもので、どんなに嫌なことがあっても、ちょっと嬉しいなとか、楽しいなという気持ちになっただけで、幸せな一日になるんじゃないかな。と、ふと考えた一日になった。

平和のありがたさ

建築学科1年 井之上 武

僕は普段、生活している中で、「平和のありがたさ」というものを感じたことはありません。

しかし、僕のおじいさんは「昔に比べて、ずいぶん平和になった」ということをよく口にしていました。今でも家に帰ったときには、その言葉を耳にすることがあります。しょっちゅうそのようなことを言っているということは本当に今の世の中が「平和」と感じているのでしょうか。そんなことを聞かされて育った僕は「今の世の中は平和なんだ」という言葉を頭の片隅に置いて普段生活していました。

ところが、僕はそう思っているだけで、初めに書いたように「平和」というものを感じたことはありません。

おじいさんには感じる事ができるのに、僕には感じる事ができない。違いは何なのか。そう考えて僕なりに出た答えは「体験」です。戦争していた

時代で育ったおじいさんはそれがどんなに厳しかったかということを経験しているのです。しかし、僕は平和な時代に生まれ育ったことで平和のありがたさというものを感ぜずに生きてきました。平和があたりまえ、多くの若い人はそう思っているでしょう。

「あたりまえのことほどその大切さに気付くにくい。」このことは平和ということに関してだけでなく、普段の生活の中でも言えます。

僕はこんなことを体験したことがあります。それは、風邪を引いたときのことで。そのときは体温を計るたび四十度以上、という高熱がでていました。当然学校へは行くことができませんでした。「今ごろみんなは体育か」など考えていたら、自分も体育をしたくなり急に動きたくまりました。しかし、体を起こすだけでもつらいのにできるはずがありません。その時、初めて健康のありがたさを感じました。普段思ったこともないことが風邪を引いたことで「あ

たりまえのありがたさ」に気付くことができました。

こういった体験はだれにでもあると思います。ところが、みんな普通のあたりまえの生活に戻ると、その時感じたことを忘れていくのです。そして、再びあたりまえのことを失ってから気付くのです。

もし、それが「平和」だとしたら、そう考えると恐ろしくなります。何事も失ってからでは遅いのです。失ってから、もうそうならないように努力していくことで、その人も本当の意味で成長していくのだと思います。大げさに言えば、世界も成長していきます。

そのためにも僕は体験して気付くことのできたありがたさを常に心のどこかにとめています。全ての人が、そのことを常に、どこかにとめて生活することができたら、本当の意味で世界を平和にできると思います。

「あたりまえのことを大切に。」そうすると、そのありがたさに気付けるはずですよ。

新着図書紹介

各科・一般科目推薦図書

機械工学科

- 伝熱工学資料第5版 日本機械学会
- 機械実用便覧 日本機械学会
- 技術士第一次試験機械部門過去問題解答と解説第3版 日刊工業新聞社
- 再入門・材料力学実践編 日経BP社
- 再入門・材料力学応用編 日経BP社
- 実用・材料力学 日経BP社
- AutoCAD LT2009/AutoCAD2009スタディガイド ソフトバンククリエイティブ
- これからはじめるAutoCADの本 技術評論社

電気情報工学科

- 電気に弱い人にもわかるオシロスコープ入門—2現象オシロスコープの簡単操作ガイドブック CQ出版
- 半導体デバイスの基礎(下) バイポーラ・トランジスタと光デバイス シュプリンガー・ジャパン
- よくわかる信号処理・フーリエ解析からウェーブレット変換まで 森北出版
- 電子回路シミュレータLTspice入門編 CQ出版
- 論理回路入門 第2版 森北出版
- 絶対わかる電磁気学(絶対わかる物理シリーズ) 講談社
- 改訂新版 C/C++によるデジタル信号処理入門(デジタル信号処理シリーズ) CQ出版
- これ1冊でわかる 電気回路の基礎 丸善

電子制御工学科

- MATLAB対応 デジタル信号処理 昭晃堂
- PICで楽しむ USB機器自作のすすめ 技術評論社
- ナノテクノロジーのための走査プローブ顕微鏡 丸善

- パワーエレクトロニクス入門 オーム社
- センサの原理と応用 森北出版
- はじめての計測工学 講談社
- 技術レポート作成と発表の基礎技法 コロナ社
- 知的な科学・技術文章の徹底演習 コロナ社

物質工学科

- 光触媒応用技術 東京図書
- セラミックスの事典 朝倉書店
- 無機材料必須300 三共出版
- 化学実験 学術図書出版社
- 有機機能性材料化学 三共出版
- アトキンス物理化学要論 第4版 東京化学同人
- 量子物理化学入門 三共出版
- 数学いらずの分子軌道論 化学同人

建築学科

- 民家再生の実例-全国事例50選 丸善
- 手塚實晴の手で描くパース建築文化シナジ— 彰国社
- 日本建築学会の技術者倫理教材 日本建築学会
- 世界の現代建築 丸善
- 横浜国立大学 卒業設計作品集2009YOKOHAMA NATIONAL UNIVERSITY DIPLOMA PROJECTS 2009 横浜国立大学工学部建設学科建築学コース
- 誇れる郷土ガイド—日本の伝統的建造物群保存地区編 シンクタンクせとうち総合研究機構
- 藤本壮介 原初的な未来の建築 Primitive Future 現代建築家コンセプト・シリーズ1 INAX出版
- NHK 夢の美術館 世界の名建築100選 新建築社

一般科目

- 英語リーディングの秘密 研究社
- どんでん話すための瞬間英作文トレーニング ベレ出版
- 理屈じゃ英語は話せない!—普読すれば自然に身につく、英文法の急所75項目 アルク
- 日本の古典をよむ(セット) 小学館
- フォトサイエンス物理図録 数研出版
- 高専の物理 森北出版
- 日本の歴史 全17巻 小学館
- 戦争の日本史 全23巻 吉川弘文館